

Quarantine

隔離とは、孤立と予防的排除の状態として、西洋社会の基本的な心のありようである。

エイズの蔓延（1981年）から、ツインタワーへのテロ（2001年）を経て、新型コロナウイルス（Covid-19）に至るまで、人々は自らの生存に危険を冒すまいとして、徐々に、しかし否応なく、社会生活から自らを排除してきた。

この世界のこの一角で、人間たちは自分の家の中、自分の門の内、自分の壁の背後、自分の脳の中に生きることを選び、未来に魔法のように起こるはずの事柄について並外れた空想を織りなし、技術が心の意味と温もりの空虚を埋めうるという空しい可能性に身をゆだねている。

《Quarantine》のシリーズは、豊かな西洋文明における現代人の像を中心に据えている。

それは、死ぬこと、あるいは十分に長く生きられないことを恐れるあまり、生きていると想像することを選び、

現実の生の、安心で安全な代替物で自らを取り囲む存在である。

この心のありようは、身体を運動と快楽の道具として排除する。

身体はまず何よりも、致命的なウイルスを媒介する道具となる。

生の経験は、仮想的で、位置をずらされ、主として視覚という感覚と、脳という唯一の器官へと向けられる。

私は、頭の代わりに大きな球を持つ、頭部のないモデルたちを描く——言い表しえず、実現しえない欲望に、

そして、再び本当に生きることが可能となる素晴らしい未来に託された恐れと希望に、あふれかえった球を。

監禁にも似た状態のなかで、私たちの移動の自由が制限される状況のなかで、

その理由がどうであれ、私たちの精神に残された唯一の可能性は、想像力を通して旅すること、

新たな世界へと向かい、その自由という自然な状態にとどまり続けることである。

芸術と文化は、ファシズムにも、スターリニズムにも、その他の独裁のもとでも、決して死ななかった。

死ぬのはただ、夢見ることをやめた人々の精神だけである。

危機は、あるシステムやある過程の現実の状況をあらわにする。

2019/2020年のパンデミック危機にも、私たちがどこに生きているのかを理解させ、

また、私たちの現実について今日まで自らに繰り返してきた、虚構で偽善的な物語から私たちの精神を解き放つ助けとなった、という美点があった。

危機は、私たちの真の優先事項が何であるかを見せてくれた——

社会としてではないにせよ、少なくとも、同じ国に生き、
同じ法に従う人々の集団としては。

必要なサービスと不要なサービスとのあいだで決めねばならない必要に迫られて、
私たちは、公教育、スポーツ、芸術、文化がそのうちに含まれないことを、
そしてもちろん、憲法によって定められた、領土内での人の自由な移動を否認することを、
認めた。

結局のところ、「イタリアは労働の上に築かれた民主共和国である」のであり、その他はすべて昔から後回しにされる。

労働者が、家賃を払い市場で買い物をするための最低限の生活手段を持つという以外に、
自らの生活に満足しているかどうかは、誰も気にかけない。

公教育は二次的な重要性しかないとみなされている。

その質が劣悪だからであり、子どもに高水準の教育を与えたければ私的な領域での教育が必要になることを、私たちは昔から知っている。

スポーツもまた評判がよくない。わが国で良い体型を保つことは、
自らの免疫を高める手段としてよりも、ファシズム的な共感の徴候とみなされる。

反対に、高水準のスポーツ（そこには大きな経済的利害が存在する）は
必要とされ、一般市民に課された不条理な用心のいずれをも伴わずに行われた。

芸術と文化は、言葉の上では重要とされるが、それらは本当に働いていない者の領域に属する、
というのが広く行き渡った見解である。

経済という領域が、生活のあらゆる領域を呑み込み、本来剰余価値を生みえない領域においてさえ、

剰余価値の創出を必要なものとした。

医療企業となった公的医療、学校＝労働となった学校、

投資対象となった芸術、大ファンドの投資領域となった科学——

これらはすべて、経済的な「より多く」の創出を永遠に追い求めるという病の徴候である。

この視点からすれば、共同体にとって費用がかかるとはいえ、責任感があり、
連带的で喜びに満ちた人々を育てうる学校には、何の価値もない。経済的なものとは異なる
剰余価値を生み出すことは、
二次的なものとみなされる。

そのうえ、経済領域で生み出された剰余価値は、新たな剰余価値を求めて新たな活動へと
再投資され、

蓄積という唯一の目的のために無限に繰り返される——二次的とみなされる領域へではなく。

最後に、税収の大部分は、まさにそれらの経済領域が困難に陥ったときに、
それらを支えるために使われる。

この危機におけるメディアの役割は、対照される一連の主張を公衆に提示する能力の欠如を
告発している。

メディアは単一の視点へと平板化され、異なる視点を、まったく別の歴史的状況で生まれた「否認主義者」という語で断罪するまでに至っている。

支配的な主張とその他の主張とのあいだに討論は予定されておらず、それについて語ることも許されない。

危機に際して、メディアは一種の戦時態勢をとり、市民を恐怖に陥れ、既成の権力と、それがとる措置を——それがどのようなものであれ——支持する。この態勢によって、彼らは接触数と売上を増やす。

私たちは皆、何か特別に重大なことが起きているかどうかを知りたがっており、彼らは政治権力（出版のための公的資金）および経済権力と関係を深める格好の口実を見いだす。

公共メディアもまた、学校、医療、司法、芸術、文化その他の領域と同様、経済の圏域の外に置かれれば、（もし共同体というものが存在するなら）その共同体のために、より良くその務めを果たすだろう——

ルドルフ・シュタイナー（Rudolf Steiner）がすでに百年前に理論化したように。教えない学校、報じないメディア、治さない病院、そして不条理な官僚の迷宮を作り出すことで

私たちの時間を奪う行政や公的機関——

そこで働き、たいていはひどいサービスを提供して給料を得ている者を除いて、これらのサービスを使うことで誰が得をするのか。

機能しない何かを持つほうが、何もないよりまだ、と私たちは主張すべきなのか。これは、有害で汚染をもたらす製品を——いっそ使わずに済ませるのではなく——買い、消費させる、あの同じ論理ではないのか。

公共のサービスを生み出すこのシステムの明白な無能ぶりを見れば、この段階に至ってはむしろ、

それを完全に断念し、生活のあらゆる領域を私有化するほうが、偽善が少ないのではないか。

コロナの文脈で、宗教は教会を閉じるほどに無用であることをあらわにした。

私たちは、イタリア人の大半がキリストのメッセージに結びついた精神生活を送っていると想像していた。

これほど誤ったことはなく、選挙の結果から私たちはすでにそれを理解していた。明らかに、多くの人

迷信的な儀式を行うために教会へ行っていたのであり、その儀式はウイルスによって危険で無用なものにされた。

私たちが本当に信じ、そこから慰めを得る唯一の宗教は、科学である。

だが私たちはそれを宗教的な狂信をもって信じている。ただ一人の真の疫学者が存在し、教皇でさえその前にひれ伏す。

Luca Motolese

motolese.com — 原文はイタリア語